

ガンの恩師に「授業」贈る

転移性肝がんで闘病中の恩師を励まそうと、教え子たちが十八日鳥取県立鳥取西高校(鳥取市東町二丁目)で「三十分間の補習授業」を開いた。六年前まで同校で日本史を教えていた浜崎洋三さん(60)。三十四年前、最初に担任を務めた一年八組の教室が最後の授業の会場に選ばれ、県内はもちろん大阪や兵庫県からも駆けつけた約百人の卒業生が廊下にまであふれた。病床から再び教壇に立った先生は、「伝えたいこと」と題して、予定を大幅に超える一時間、時には机に手をついて身を乗り出し、自らの人生観を教え子たちに語りかけた。

授業開始は午後二時。全

員が起立で迎える中、浜崎先生が教壇に立った。昔ながらの白のカッターシャツにノーネクタイ。「ここ一カ月ほど気力がなかったが、それを感じとった教え子たちが、世の中に引っぱ

鳥取西高

り出してくれた」と、切り出した。

浜崎先生は京大文学部を卒業後、一九六〇年に母校の鳥取西高に赴任。県史の編さんに携わった約十年間を除き、九〇年まで鳥取西高で主に日本史を教えてき

卒業生100人 教室に集う



時には立ち上がってチョークを使う浜崎さん(鳥取市東町二丁目の県立鳥取西高校で)

た。九三年から県立図書館長を務めているが、昨年九月、胃かいようの手術を受けたとき、がんが見つかり、告知を受けた。

浜崎先生の教え子で主治医でもある鳥取赤十字病院の徳永進さん(46)が「残された時間はあまりない。もう一度、教え子に何かを言い残してほしい」と説得。同窓生らに呼びかけて準備した。体力を考えて授業時間は三十分間とした。

ところが、授業を始めた浜崎先生は、最初こそ用意されたいすに座ったままだったが、次第に声を張り上げ、時には立ち上がってチョークを握り、インド哲学にも触れながら、「立身出世は国家主義と結びついた恐ろしい罠(わな)」などと独自の人生論を説いた。浜崎先生が時折ちりほめる昔ながらの冗談に教室内には何度も何度も笑い声此起彼伏、授業は大幅延長。

教え子の一人で県職員のア藤隆一さん(46)は「口うるさい先生だと思っただが、今改めて話を聞いて先生の本当の気持ちを知った気がする」。

最後に全員で校歌を歌って授業を締めくくり、教え子が立ち上がって拍手する中、浜崎先生は六年前と同じようにゆったりとした足取りで教室を出て行った。